様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２１８８

研究課題名（和文）デリダの脱構築における存在論的技術論の射程

研究課題名（英文）Derrida's Deconstruction as Technological Ontology

研究代表者
藤本　一勇（Fujimoto, Kazuisa）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：７０３１８７３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　フランスの哲学者ジャック・デリダは、伝統的な西洋存在論の存在概念の核心部に、従来対立すると考えられてきた技術概念を導入し、存在論の枠組みを作り変えた。物質界から生命界を経て人間界に至る多様な技術性を視野に収めた結果わかるのは、人間の技術の特殊性が一挙に距離を廃そうとする直接性への欲望にあるということだ（「現前の形而上学」）。しかし技術や存在に内在する「ずれ」や「間」を否定し排除するとき、悪しき暴力が発動する。デリダは技術に存在する「ずれ」を開放的に活用する技術を「脱構築的な技術」として探究し、それを人間に憑依する言語や思考の欲望のなかに求めたと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　デリダの技術存在論を探究することによって、人間や世界の存在にとって技術の問題が二次的ではなく本源的なものであること、自然も一個の技術であることを哲学的に立証したことは、存在と技術を対立関係に置き、技術問題を貶めてきた伝統的存在論の哲学に大きな反省を迫ることができる。同時に、抽象的な哲学的存在論の議論の核心に技術の問題をすえることによって、技術と人間、技術と社会との関係にも新たな光を当てることができた。またデリダが技術の本質として、遠さと近さ、可能性と不可能性の永遠の循環構造を提示したことを明らかにした点も、現代の情報メディア技術社会における批判的創造の哲学的基礎づけとして期待される。

研究成果の概要（英文）：　Jacques Derrida introduces the concept of Technology at the heart of traditional Ontology for the purpose of recreating its framework. We have followed Derrida’s works in all fields of Beings (physical, biological, social or cultural) in the same perspective of technological being, with the result that the human’s technology consists in the desire to abolish the distance for immediacy, a desire that Derrida calls “The metaphysics of Presence.” But rejecting gap and lag inherent in technological beings could lead to a mortal violence. Derrida’s deconstruction calls us to face and undertake these division and delay as conditions of our being, and to produce the auto-deconstructive technology that is capable to build in itself the mechanism of auto-criticism. We have verified that Derrida finds this typical mechanism in the human language and the act of thinking, which allows him to call for the “New Humanities” that has the power of coexisting with the advanced technologies.

研究分野：哲学

キーワード：技術哲学　存在論　脱構築　メディア　情報　生命　亡霊　来たるべきデモクラシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来デリダ哲学と技術との関係について表面的には指摘されていたが、それがデリダが考える存在論とどのような関係にあるかについては、深く掘り下げた研究はなされてこなかった。先駆的に足立和浩は『グラマトロジーについて』の翻訳に付した訳注のなかで、デリダのグラマトロジーとサイバネティクスや情報理論との関係を示唆したが、それ以上の研究は進めなかったし、マーク・ポスターらの情報社会論者たちも、デリダの技術論を古い活字文化の枠に縛られたものとみなし、その存在論的な意義について議論を深めることはなかった。1990 年代以降になると、デリダ自身に政治的・倫理的発言が目立つようになったこともあり、デリダにおける技術の問いに関する研究はいっそう後景に退いてしまったと言わざるをえない。しかし、本課題研究者から見れば、デリダにとって技術の問いは初期から最晩年まで一貫した問いであり、後期の「憑在論」や「来たるべきデモクラシー」といった主題も、技術性の問いなくしては成立しない。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、デリダ哲学において技術の問いが終始一貫した通奏低音であることを証明することにある。しかも単に主題として表に現れるというのではなく、技術の問題はデリダの存在論理解とその脱構築において本源的な役割を果たしており、存在のメカニズムの根底に技術のメカニズムが働いていることを明らかにする。

（２）そうしてデリダにおける「技術存在論」とでも呼ぶことのできるものを抽出した後、それが「憑在論」や「メシアなきメシア性」、「歓待」や「来たるべきデモクラシー」といったデリダのビッグ・テーマとどのように関わっているか（それらの基盤にあるか）を明らかにする。

３．研究の方法

（１）まず、デリダ哲学の理論的基礎が提示されている 1960 年代後半から 1980 年代前半までの著作を中心に、デリダにおいて技術の問いがいかに彼の脱構築作業の核心にあり、それが単なる技術論ではなく、存在論的技術論であるかを明らかにし、その技術存在論のメカニズムを解明する。

（２）次に、技術存在論の基礎構造に立脚して、いかに 1980 年代後半以降のデリダの政治的・倫理的諸問題が展開されているかを明らかにする。主なテーマは「憑在論」「歓待」「メシアなきメシア性」「来たるべきデモクラシー」「動物性」等々である。

４．研究成果

（１）**技術存在論の基本構造**

デリダの技術論の核はエクリチュールとテクストの概念にある。デリダはこの二つの概念を、「通常」の狭い意味での「文字」や「文献」から出発して発想しながらも、それを「書き込み」一般、「書き込み」効果から織り成された錯綜体一般へと拡張する。デリダによれば、身体感覚（感性的刺激やそこに生じる体‐制、脳内の電気信号の流れ、等々）、意識や精神、社会関係、言語や芸術等の文化現象も、すべて広く、存在論的な水準において書き込み効果として捉えることが可能であり、これらの多様な世界現象の総体を、書き込みの錯綜体（グラメー、テクスト）として探究する学として、デリダは「グラマトロジー」を構想した。この「グラマトロジー」の中核概念である「グラメー」（書き込み、刻印）は、ほぼ「情報」の概念と重なる概念であり、いわゆる「情報科学」における「情報」概念（シャノン、ノイマン、ウィーナー等）との比較研究をおこなった。その結果、情報科学の情報概念が「認識主体」（人間かコンピューターかを問わず）にとって「意味」をもつものと考えられているのに対し、デリダの「グラメー」概念は、認識主体を抜きにしても作用し効果を及ぼすものとして、「まったき他者」、端的に欠乏的な「唯物性」であることが判明した。この単純な唯物性、まったき他者としての刻印こそ、デリダの考える「存在」そのものである。

デリダが考えるこの「存在」概念は、伝統的な哲学が考えるような「実体」でも「本質」でも「形相」でもなければ、「意識」、「主体」、「精神」でもない。またハイデガーが主張するような「現前運動」の出来事性でもない。それはむしろ、存在者とその存在とを成立させる、様々な力が交錯し関係するたえざる「流転」運動の「エフェクト（効果＝結果）」であり、そうした諸力の間の、それらの間に「存する」（「脱‐存」的に「存する」）「関係性＝〈間‐係‐性〉」であり、一種の存在論的「テレ‐コミュニケーション（télé-communication）」である。デリダにおいて、存在は、「世界」の諸力の交差点であり、その錯綜の「痕跡」であり、多数多様な力が交流して残した「遺言」である。デリダはこうした存在の根本様態を、実在物や現前物をモデルに（時に静態的に、時に動態的に）思考された「存在」という名によってよりも、いっそう錯綜的で制作的でメカニカルな「技術」という名でもって思考することを、あるいは「技術」の名そのものをずばり出さずとも、伝統的に技術の側に分類されてきたヴォキャブラリー（戦略素・古名）によって思考することを選んでいる。そうした語彙群は実に枚挙に暇がない。例えば、エクリチュール、テクスト、シニフィアン、署名、記録、アーカイヴ、記憶術、複製、反復、タイプライター、ティポグラフィー、接ぎ木、移植、補綴、代補（サプリメント）、舞踊術（コレオグラフィー）、郵便葉書、トランスポーター、テレパシー、テレフォン、テレグラム、テレヴィジョン……（まさにデリダの無限に技術的な語の、それ自体テクニカルな連鎖である）。これらは単なる比喩ではなく、まさしく存在概念と存在の出来事性（存在という事

態）の核心そのものを構成しているのである。以上が、デリダの初期著作群から明らかになる彼の「技術存在論」の基礎的な枠組みである。

（２）**「憑在論」の遊動するテクノロジー**

こうしたデリダの「技術存在論」（と課題研究者が名づけるもの）は、そのまま中期から後期に至る「憑在論」の基礎構造をなしている。「憑在論（hantologie）」という用語がそのものとして現れるのは『マルクスの亡霊たち』（1993 年）においてであるが、すでにデリダは初期の頃から、「ゾンビ（le mort vivant）」（『声と現象』）や「モンスター」（『哲学の余白』）、「ドッペルゲンガー（le double）」（初期のあらゆる書物で）について、それをフッサールやヘーゲルやハイデガー（いわゆるフランスにおける「３Ｈ」）の存在論との関連で議論していた。そこで問題になっていたのは「憑存性」（hantise）である。この hantologie の語根を構成する hantise は、精神分析における「反復強迫」やハイデガー存在論における「住居」（「存在の家」：デリダはこれを一種の「亡霊屋敷（haunted mansion）」にリフォームする）の問題にも深くかかわるが、さらにデリダが展開する遠隔テクノロジー論との関連で言えば、それが経済における「貨幣」をもとにした「資本蓄積」や今日のグローバル（トランスナショナル）に拡大した「情報資本主義」の問題にもかかわり、また密接に連動した仕方で、生命レベルにおける「感染・汚染（contamination）」の問題にもかかわる点が重要である。本研究は特にこの点を重視して探究した。デリダは初期の『散種』（1972 年）の頃からすでに、交通や情報の拡散が、閉じた共同体主義からの解放をもたらすと同時に、他方では、（社会と個人の両面における）「生体」に危機をもたらす危険と表裏一体である構造（「薬」が同時に「毒」でもある超越論的構造）を抉り出しており、今日の「パンデミック」（グローバルな疫病感染）問題も、デリダにおいてはすでに織り込み済みの事柄であった（デリダの「自己免疫」論）。この亡霊的感染がもつ開放と恐怖の二重構造（そしてそこから生み出される覇権主義的反動とそれに抗する反抗の自由の力）は、デリダの哲学において生涯一貫したモチーフであり続けるが、それが『マルクスの亡霊たち』以降に、「歓待」や「動物性」、「メシアなきメシア性」等の主題にも表れている。特に、やはり『マルクスの亡霊たち』で登場した「メシアなきメシア性」（そして目的論とは区別された終末論の可能性）は、「救済」なく「待つ」こと、「最終解決」なく「解決」を求めて砂漠を流離う努力をすること、「赦しなき赦し」を求めること（『赦しえぬものを赦すこと』2012 年）、そうした緊張感に満ちた、引き裂かれた「滞留」（『滞留』1998 年）こそが、他者との真の倫理関係を可能にし、政治的にも抑圧や暴力を批判していく土台になることが、技術存在論の基礎構造と 90 年代におけるデリダの政治・倫理思想との比較検討から明らかになった。

（３）**脱存在論的な政治テクノロジーとしてのデモクラシー**

デリダの技術存在論は、その核心を永遠の「遠距離通信」という一種の「亡霊のテレフォン」に存することが解明されたが、それは彼独特の「生政治」論、デリダに言えば、むしろ「生き残り」＝「残余の生」（Sur-vie）の「政治」思想へとつながっていく。「政治（politique）」とは、西洋においては伝統的に、「ポリス」という一種の囲い込みとセキュリティのテクノロジーであり、その伝統は、プラトン／アリストテレスから近代におけるボダン、ホッブズ、ルソー、ベンサム、カント、フィヒテ、ヘーゲル、ハイデガーまで一貫している。そうした伝統的な「政治」概念を、デリダは「現前性」の場に纏ろうことのない「亡霊」を悪魔祓いするエグゾルシズム（悪霊払い）として批判し、むしろ抜本的に開かれた政治体制として「来たるべきデモクラシー」を構想する。しかしこのデモクラシーは近代主権論が考えたような実体的な個からなる実体的な国家制度ではないし、ルソーに典型的に見られるような「一般意志」に解消されるようなものでもない。「デモクラシー」の土台としてデリダが語る「デモス」とは、それが個人主体（各市民・人民）であれ、その集合主体（国家）であれ、一般に主権をもった主体としては捉えられず、たえずそうした虚構の主体から零れ落ち、それをはみ出す、「主体」に憑依して離れないドッペルゲンガーであり、「主体」を包囲し詰問する「残余」の「部分」である。それはあらゆる「存在者の存在」に憑依する、存在の外部拡張（脱‐存、外‐立）的な「部分（part）」（バタイユの言う「呪われた部分」＝主権に抵抗し続ける部分）であり、すなわち存在の ex-istence という（「存在」が「自然」だとすれば）存在の拡張的＝技術的な潜勢力（puissance）である。ここには形而上学的な自然概念に立脚する伝統的な主権性（souveraineté：神であれ国家であれ個人であれ、なんらかの主体の絶対的な権力。これは究極的には、なんらかの他者のエグゾルシズムを意味する）を脱構築しようとする、〈存在＝脱存的外部化＝存在論的遠隔テクノロジー〉というデリダの技術存在論の発想が蠢いている。このことを本研究は、兄弟性（fraternité）から友達性（amitié）へと政治を切り替えようとする『友愛のポリティクス』（1994 年）にもとづいて探究した。そこでは「友＝共」の声（voix：投票）は根源的に亡霊の声であり、自己も含めた「友」とは「ゾンビ」あるいは「ゴーレム」（ないし「フランケンシュタイン」、つまりテクノロジー存在）であり、この技術存在的な共同体こそが、デリダの目指す、解消しえない他者性に立脚する「来たるべきデモクラシー」の根本である。「ゾンビの共同体」以外のいかなる共同体も、所詮は、同質的な（男性的であれ女性的であ

れ無性的であれ）他者性排除の共同体に過ぎず、それは「友＝共」に本質的・構造的に含まれる異質性を排除・抑圧した共同性に過ぎない（つまり無条件な共同性ではない）。

（4）**脱構築＝葛藤するテクノロジー**

テクノロジーを、自己の絶えざる拡張運動＝脱‐存運動として捉えるならば、他者への応答としての「責任（responsabilité）」もまた、一種の médiumnique（霊媒術＝メディア術）と捉えられる。デリダは「主権（souveraineté）」は真の責任主体たりえないと言う。なぜならば、主権は自己にまつわる多種多様な亡霊性を抑圧・排除することによってしか成り立たないからである。それに対して、真の責任主体たりうるのは、自己も含めたあらゆる存在の根源的亡霊性に「応答する可能性（responsabilité）」をもつ霊媒的主体のみである。伝統的には「主体」として想定されることのない、他者に憑依され、他者に突き動かされる「主体」こそが「応答責任」のある主体である。デリダはこうした他者性に憑依された応答テクノロジー、応答メディアとして言語やエクリチュールを理解しており、それが彼の「新しい人文学」における新テクスト主義に現れている。言語や文献、デリダが一般化して語る Littéralité, Littérature がなぜ重要かと言えば、文字性、文‐学（というより「文‐章」あるいは端的に「文」と言ったほうが適切だろう）は、そこに極限的な脱存性（ex‐istence）や抵抗性（ré-sistence）が刻み込まれているテクノロジーだからである。デジタルメディアや視聴覚メディアはこの抵抗力において劣っている。それらはあまりに即効的かつ直接的であるがゆえに、みずからの「媒介性」「間接性」を自己否認する効果をもたらすのであり、自己に対する脱構築力（つまり ré-sistence の力）が少なく、自己の本質である亡霊性をみずから踏みにじるテクノロジー（つまり自己のテクノロジー性を忘却するテクノロジー、自滅するテクノロジー）なのである。テクノロジーがテクノロジーとしての存在を貫徹しようとするのであれば、自己を自然化したり絶対化しないテクノロジーこそが、「優れた」、「より悪くない」テクノロジーである。デリダが肯定し主張するのは、この絶えず自己脱構築する技術存在の可能性である。

そうした技術存在の可能性を大切にする技術こそ、デリダにとってアンビヴァレンツでしかありえない言語なのである。本研究では、『他者の一言語使用』のなかでデリダが自己の伝記的な事柄として語る、フランス語という母語である「他者の言語」（母語＝他者の言語）が、自然なものでありながら技術的なものであるという事態、これこそが技術一般がもつ存在論的・政治的・倫理的な可能性（応答責任可能性）の原型としてデリダが捉えるものであるということを考察した。そこにこそ 21 世紀の人文学の可能性、AI シンギュラリティ時代における「来たるべき人文学」の可能性はある。おそらく人間が人間であるかぎりにおいて逃れることのできない（悪魔祓いすることのできない）言語という技術がもつ拘束力・重力、言語という、薬であると同時に毒でもあるこの技術の根源性の承認とそれと葛藤は、デリダ哲学および脱構築の可能性の中心に存するものであり、この葛藤から目を背けることなく、生涯みずからの思想の源泉にして終末点として探究し続けた一貫性こそが、デリダ哲学の最大の功績ではないだろうか。それは最終解決の不可能性を徹底的に引き受けたからこそ訪れる「メシアなきメシア性」（救済なき「救い」）の瞬間だったと言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 藤本一勇
２．発表標題 デリダにおける「精神分析的なもの」
３．学会等名 日本 ラカン協会第19回大会、専修大学（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuisa Fujimoto
２．発表標題 Between World and Sekai, Deconstruction of Two Worlds
３．学会等名 The 11th East Asia Forum on Humanities, Hanyang University, Seoul（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤本一勇
２．発表標題 近代の超克論とポストモダニズム
３．学会等名 シンポジウム「日本研究の脱構築」、明治大学（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuisa Fujimoto
２．発表標題 Deconstruction de la tele-technologie : singularite, dissemination et hantologie
３．学会等名 DERRIDA ET LA TECHNOLOGIE, Columbia Global Centres, Paris（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

1．著者名 ジャック・デリダ著、藤本一勇訳（刊行予定、初校）	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 －
3．書名 哲学のナショナリズム（ゲシュレヒトIII）：性、人種、国民国家、人類	

1．著者名 アラン・バディウ著、藤本一勇訳（刊行予定、初校）	4．発行年 2020年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 －
3．書名 哲学の条件	

1．著者名 アラン・バディウ著、藤本一勇訳	4．発行年 2019年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 656
3．書名 存在と出来事	

1．著者名 ジャック・デリダ著、藤本一勇訳	4．発行年 2019年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 540
3．書名 プシュケー　他なるものの発明 II	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考